



青年の公共空間における社会的迷惑と抑制要因の検討 ー他者との関係性と状況適合性に着目してー

谷, 芳恵

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2014-03-25

(Date of Publication)

2015-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6170号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006170>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

氏 名 谷 芳 恵
専 攻 人間形成科学専攻
指導教員氏名 齊 藤 誠 一

論文題目

青年の公共空間における社会的迷惑と抑制要因の検討
—他者との関係性と状況適合性に着目して—

論文要旨

公共空間における社会的迷惑を抑制することは、無用な軋轢をなくし、快適な社会生活を送る上で重要な課題である。本論文では、公共空間、特に電車利用場面で起こる、青年による社会的迷惑に影響する要因について検討する。それにより、社会的迷惑の抑制機序についての知見を蓄積し、青年に対する社会的迷惑防止の教育効果の向上の一助とすることを目的とする。

第1部では、電車利用場面での社会的迷惑の問題と現状について概観して、「行為者が自己の欲求充足を第一に考えることによって、結果として他者に不快な感情を生起させること、またはその行動」(斎藤, 1999)を社会的迷惑と捉えることとした。まず、青年の社会的迷惑の背景因として規範意識の希薄化に注目し、その根底に他者との関係性維持の欲求があり、「他者に迷惑をかけない」ことが重要な行動基準としてあることを示した。本論文では、周囲の他者との関係性の悪化を回避するために社会的迷惑は抑制されるとして他者存在の効果に注目し、社会的迷惑の生起状況について他者との関係性の観点から整理した。そして公共空間を周囲の他者との関係性から4状況に分類し、そのうちの集団状況と個状況の2状況を取り上げた。これらの他者との共存状況においては、どのような行動がふさわしいかという状況適合性の評価が影響を及ぼすと考えられるが、その状況適合性の評価が状況によって異なることが考えられた。そのため、集団状況と個状況それぞれにおける社会的迷惑の影響要因を比較することで、青年による社会的迷惑の様相をより明確に捉えることができると考えられた。

第2-4部では、実証的研究を行った。本論文では、社会的迷惑を捉えるにあたり、社会的迷惑を認知する側(認知者)の要因、社会的迷惑を行う側(遂行者)の要因、社会的迷惑が起こる状況要因の、3つの視点からアプローチを行った。第2、3部では、集団状況と個状況の比較を行い、状況ごとの影響要因の違いを中心に検討を行った。第4部では、社会的迷惑が特に引き起こされやすいと考えられる個状況に注目し、その状況に対する認識の違いが社会的迷惑抑制に及ぼす影響を検討した。各研究における状況設定については、集団状況では自己と同性友人及び見知らぬ他者が共存する場面を、個状況では自己と見知らぬ他者が共存して周囲に顔見知りがない場面を想定させた。

第2部では、認知者の立場から社会的迷惑の抑制を検討するため、社会的影響性の認知の指標として迷惑認知に注目し、研究1~3を行った。研究1では、立場と関係性の違いによる迷惑認知

の差について予備的検討を行った。その結果、青年は見知らぬ他者には迷惑を感じるような行動であっても、身近な他者に対しては迷惑を感じにくかった。また、身近な他者も自己の行動を大目に見てくれるだろうと認知しており、青年と身近な他者との間では社会的迷惑の過小評価が起こると考えられた。研究2では、見知らぬ他者の迷惑認知が社会的迷惑の行動頻度に及ぼす影響と、状況及び共感性の調整効果について検討した。その結果、状況と共感性による有意な影響は認められず、見知らぬ他者の迷惑認知が高いほど社会的迷惑が抑制されていた。このことから、他者への思いやりの低さが社会的迷惑の原因であるとする見解は、公共空間における社会的迷惑においては支持されなかった。研究3では、見知らぬ他者の迷惑認知と自己のネガティブ評価が社会的迷惑の行動頻度に及ぼす影響と、状況及び自意識特性の調整効果について検討した。その結果、集団状況と個状況の両状況において、自己のネガティブ評価が高いほど社会的迷惑は抑制されていた。見知らぬ他者の迷惑認知については、個状況で有意な影響が認められたが、自意識特性の高さによって抑制効果に違いがみられ、公的自意識と私的自意識が共に高いあるいは共に低い群でのみ社会的迷惑を抑制していた。このように、見知らぬ他者の迷惑認知が社会的迷惑に及ぼす影響は限定的なものにとどまった。

第3部では、遂行者の立場から、社会的迷惑の抑制を検討するため、社会的迷惑の遂行時に喚起される罪悪感と恥意識に注目し、研究4、5を行った。研究4では、青年が社会的迷惑をすることによって喚起される罪悪感について、共感性、自意識特性との関連から検討した。その結果、共感性の低位尺度である共感的関心、ファンタジーと有意な関連がみられ、他者に対して共感的に関心を向けたり、空想的に他者の気持ちを想像したりする傾向が高いほど、社会的迷惑に対する罪悪感が喚起されやすいことが示された。研究5では、青年の行動基準選好が社会的迷惑をすることによって喚起される罪悪感と恥意識の喚起に及ぼす影響と、喚起された罪悪感と恥意識が社会的迷惑の行動頻度に及ぼす影響について検討した。その結果、集団状況と個状況の両状況とも、自己中心的基準を重視するほど罪悪感と恥意識は喚起されにくかった。また集団状況では、他者配慮の基準と仲間配慮の基準を重視するほど罪悪感と恥意識が喚起されやすかったが、個状況で他者配慮の基準に有意傾向がみられるにとどまった。社会的迷惑の行動頻度に及ぼす影響については、集団状況においては罪悪感と恥意識が高いほど社会的迷惑は抑制されていた。これに対して個状況では、恥意識に有意な影響は認められなかった。しかし、それと同時に罪悪感の社会的迷惑を抑制する効果が補完的に強まっており、集団状況と個状況の間で社会的迷惑の行動頻度に有意な差は認められなかった。このことから、両状況において社会的迷惑を抑制するには、社会的迷惑に対する罪悪感と恥意識を高めることが有効であると考えられ、そのためには自己中心傾向を抑制することが重要であることが示唆された。

第4部では、個状況に焦点をあて、公共空間についての状況認識が社会的迷惑に及ぼす影響を検討した。公共空間を公的な場と捉えるのか、それとも私的な場と捉えるのかという公私認識は、社会事象や周囲の他者への無関心な態度と関連しており、そのような態度が社会的迷惑を引き起こしていると指摘されている。研究6では、青年が公共空間に対してどのような公私認識をもつのか、他者意識や社会事象への意識との関連から、公私認識の特徴を検討した。その結果、青年は概して電車利用空間に対して公的認識を示した。しかし、専有空間認識について公的認識群と私的認識群が同程度見られ、青年には電車利用場面を一人で専有できる空間と認識する態度が認められた。電車利用場面を専有空間と認識しているほど、他者を意識する傾向が

(氏名 谷 芳恵 , No. 3)

高く、社会不安を感じやすく、公共利益に則った行動選択を好んでいた。また、他者と共有される空間であると認識しているほど社会不安傾向が低く、自己解放できる空間であると認識しているほど行動決定に際して公共利益を重視する傾向が低かった。このことから、公共空間に対する私的認識が周囲の他者や社会事象に対する無関心の表れであるという見解は支持されなかった。研究7では、青年の公私認識が社会的迷惑に及ぼす影響を検討した。その結果、個状況に対して公的認識をもつ場合、一般的に社会的迷惑が許容されていないと認知しているほど社会的迷惑は抑制されていたが、他者の迷惑認知は行動頻度に影響していなかった。私的認識をもつ場合には、社会的迷惑が他者の迷惑になっていると認知しているほど社会的迷惑は抑制されていたが、一般許容度については有意な影響はみられなかった。このことから、他者配慮的態度が電車利用場面を私的な場であると認識することが必ずしも社会的迷惑を促進するとはいえなかった。公私認識の違いによって社会的迷惑に対する影響要因は異なるものの、公私いずれの認識においても、社会的迷惑は周囲の他者の迷惑認知や許容度といった他者の評価を配慮した上で抑制されていることが示唆された。

第5部では、以上の第2~4部の実証的研究において得られた知見から、集団状況と個状況それぞれにおいて社会的迷惑の影響要因を整理し、その背景にある周囲の他者に対する配慮的態度について総括を行った。他者配慮的態度に着目すると、個状況では他者の迷惑認知と許容性、集団状況では恥意識が社会的迷惑を抑制していることが示された。そのため、状況によって他者配慮性の表出に違いはあるが、いずれの状況においても他者配慮性が社会的迷惑に影響を及ぼしていると考えられた。このことから、社会的迷惑に対する共通認識を形成する近年の動きの有効性が示唆されたといえる。しかし、個状況における他者認知の効果は限定的であり、集団状況に比べて他者配慮的態度が社会的迷惑に影響を及ぼしにくい傾向が示されたことから、他者配慮的態度への偏重は個状況において社会的迷惑を抑制するためには十分な効果があるとはいえない。これに対して社会的迷惑に対する自己のネガティブな認知や罪悪感といった自己認知は、状況を問わず社会的迷惑を抑制する効果があったことから、自己の認知を高めることがより効果的であると考えられる。また、身近な他者への配慮的態度が「逸脱しない」配慮なのに対して、見知らぬ他者への配慮的態度は「関わらない」配慮であるといえ、これは青年の特徴として指摘されている「行動に表れない思いやり」と根源を同一にするものである可能性が示唆された。以上の結果から、他者配慮性を考慮した、公共空間におけるより広範な行動制御に関する研究への発展可能性が示唆された。

論文審査の結果の要旨

| | | | |
|---|--|------|-------|
| 氏名 | 谷 芳 恵 | | |
| 論文題目 | 青年の公共空間における社会的迷惑と抑制要因の検討 —他者との関係性と状況適合性に着目して— | | |
| 判定 | 合格・不合格 | | |
| 審査委員 | 区分 | 職名 | 氏名 |
| | 主査 | 准教授 | 齊藤 誠一 |
| | 副査 | 教授 | 吉田 圭吾 |
| | 副査 | 教授 | 城 仁士 |
| | 副査 | 准教授 | 坂本 美紀 |
| 副査 | 准教授 | 吉永 潤 | |
| 要 旨 | | | |
| <p>本論文は、公共空間における社会的迷惑を抑制することは、無用な軋轢をなくし、快適な社会生活を送る上で重要な課題として、公共空間、特に電車利用場面で起こる、青年による社会的迷惑に影響する要因について検討する。それにより、社会的迷惑の抑制機序についての知見を蓄積し、青年に対する社会的迷惑防止の教育効果の向上の一助とすることを目的とする。</p> <p>第1部：電車利用場面での社会的迷惑の問題と現状について概観し、青年の社会的迷惑の背景因として規範意識の希薄化に注目し、その根底に他者との関係性維持の欲求があり、「他者に迷惑をかけない」ことが重要な行動基準としてあることを示した。また、周囲の他者との関係性の悪化を回避するために社会的迷惑は抑制されるとして他者存在の効果に注目し、社会的迷惑の生起状況について他者との関係性の観点から整理し、公共空間を周囲の他者との関係性から4状況に分類した上で、集団状況と個状況の2状況を取り上げた。これらの他者との共在状況においては、どのような行動がふさわしいかという状況適合性の評価が影響を及ぼし、その状況適合性の評価が状況によって異なることが考えられた。そのため、集団状況と個状況それぞれにおける社会的迷惑の影響要因を比較することで、青年による社会的迷惑の様相をより明確に捉えることができると考えられた。</p> | | | |

第2部：認知者の立場から社会的迷惑の抑制を検討するため、社会的影響性の認知の指標として迷惑認知について研究1～3を行った。研究1において青年は見知らぬ他者には迷惑を感じるような行動であっても、身近な他者に対しては社会的迷惑の過小評価が起こること、研究2において見知らぬ他者の迷惑認知が高いほど社会的迷惑が抑制されること、研究3において集団状況と個状況の両状況では自己のネガティブ評価が高いほど社会的迷惑は抑制され、見知らぬ他者の迷惑認知については、個状況で有意な影響が認められたが、自意識特性の高さによって抑制効果に違いがみられ、公的自意識と私的自意識が共に高いあるいは共に低い者でのみ社会的迷惑を抑制していたことが明らかになった。

第3部：遂行者の立場から社会的迷惑の抑制を検討するため、社会的迷惑の遂行時に喚起される罪悪感と恥意識に注目し、研究4、5を行った。研究4において共感性の低位概念である共感的関心、ファンタジーと有意な関連がみられ、他者に対して共感的に関心を向けたり、空想的に他者の気持ちを想像したりする傾向が高いほど、社会的迷惑に対する罪悪感が喚起されやすいこと、研究5において集団状況と個状況とも、自己中心的基準を重視するほど罪悪感と恥意識は喚起されにくく、両状況において社会的迷惑を抑制するには社会的迷惑に対する罪悪感と恥意識を高めることが有効であることが明らかになった。

第4部：個状況に焦点をあて、公共空間についての状況認識が社会的迷惑に及ぼす影響を検討し、研究6、7を行った。研究6において公共空間に対する私的認識が周囲の他者や社会事象に対する無関心の表れではないこと、研究7において公私認識の違いによって社会的迷惑に対する影響要因は異なるものの、公私いずれの認識においても、社会的迷惑は周囲の他者の迷惑認知や許容度といった他者の評価を配慮した上で抑制されていることが明らかになった。

第5部：以上の第2～4部の実証的研究において得られた知見から、集団状況と個状況それぞれにおいて社会的迷惑の影響要因を整理し、社会的迷惑に対する共通認識を形成することの有効性が示唆され、他者配慮性を考慮した公共空間におけるより広範な行動制御に関する研究への発展可能性が示唆された。

本研究は、青年の公共空間における社会的迷惑と抑制要因について、先行研究の問題点を踏まえ、理論的、方法論的検討を行った上で、迷惑行動が顕著な青年を対象にデータ収集を行った意欲的なものであり、データ収集、分析、解釈も適切で、これまで解明されてこなかった迷惑行動の心理的過程について多角的に研究した点で総合人間科学研究科にふさわしいものといえる。

なお、本論文に関わり、以下の3編を含め6編の論文が発表されており、うち5編がレフェリーつき論文であるので、論文提出条件を満たしている。

①谷芳恵(2008). 共感性が公共場面における迷惑行為に与える影響 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 2(1), 7-12.

②谷芳恵(2010). 公共場面における迷惑行為に対する罪悪感—共感性、公的自己意識、私的自己意識との関連から— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 3(2), 21-26.

③谷芳恵(2013). 電車利用場面における社会的迷惑の抑制要因の検討:周囲の他者との関係性に着目して 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 7, 25-32.

本研究は、青年の公共空間における社会的迷惑と抑制要因について多角的に研究したもので、当該分野において重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認められる。よって、本審査委員会は、学位申請者谷芳恵は博士(学術)の学位を得る資格があると認める。